

# 沖永良部島ことばの分布と歴史

中 本 正 智

## 沖永良部島のこと

沖永良部島は、奄美諸島の中の一島で、与論島とともに沖縄に近い。その位置は、東経128°41′、北緯27°24′にある。島の大きさは、周囲50,3キロメートル、面積94,54平方キロメートルである。

島の西部に大山があり、標高245メートルであり、島の地形は平坦地が多く耕地に恵まれている。山岳や河川はほとんどない。島の西部より東洋一を誇る鍾乳洞がある。

島の産業についてみると、琉球列島の他の島と同じように「さとうきび」をつくっていたが、最近に、百合の球根やフリジア、グラジオラス、アマリリスなどを栽培してアメリカなどへ輸出している。これらの花が咲くころは、島全体が花園の観を呈する。

島びとは、美しい自然にはぐくまれて温和な風である。昔から「いらで いらばらぬ いらぶじま」といわれていて、「選んでも選ぶことができない永良部島」、つまり「どこをさがしても見つけることができない恵まれた島」の意である。これらのことばから、島を愛する人々の心が伝わってくる。

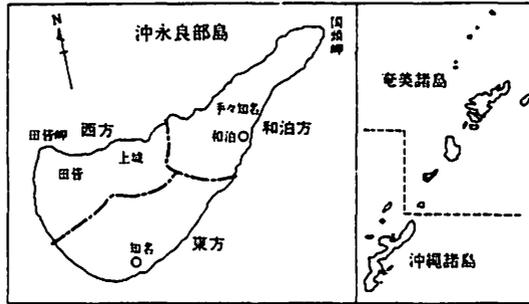
沖永良部島は、「おきえらぶ」または「おきのえらぶ」とよばれる。さかのぼると、『おもしろさうし』に、「ゑらぶしま」とか「ゑらぶせりよさ」とある。古名として「せりよさ」「せりゆさ」と記されていて、「せり」は、現代の字名の瀬利覚の「瀬利」、また沖縄の「勢理客」の「勢理」と同根であろう。

琉球王国時代には、島は三間切に分かれていた。大城間切に、和泊、和、大城、赤嶺、田舎平、後蘭、下城、田皆、島尻、屋子母、瀬利覚の11村、喜美留間切に、手々知名、出花<sup>でぎ</sup>、畦布、根折、玉城、内城、瀬名、永嶺、上城、大津勘、知名、上平川、下平川、皆川の14村、久志検間切に、喜美留、国頭、西原、古里、久志検、余多、屋者、芦清良、黒貫、徳時、馬鹿<sup>ばあ</sup>の11村が属していた。

各間切に琉球王国の役職、与人<sup>とひと</sup>、掟、目差、筆子<sup>ていこ</sup>が設けられて、その役所は、三間切まとめて大城間切和泊村におかれた。これをみると、琉球王国時代において島の行政の中心は、和泊にあったことになる。これは、言語地理学的に言語の分布を考える

ときに重要なものとなる。

沖永良部島三方略図



沖永良部島には、世之主という支配者があった。1395年頃、北山王の第二王子であった「真松千代」(まちじょ)が世之主となり、沖永良部島だけでなく、徳之島や与論島まで治めたといわれている。島には、世之主の墓が祀られている。

幾度かの曲折を経て、現在の行政区画は、一島二町であり、東部の和泊町と西部の知名町である。

沖永良部島ことばは、奄美方言圏に属しているものの、沖縄北部との関係が深く、ことばの影響を強く受けている。たとえば、奄美方言を性格づける特徴に、活用語の終止形が二形併用されるということがある。動詞「書く」なら、kakjun のような「書キ居ム」系と、kakjuri のような「書キ居リ」系の二形があり、形容詞「高い」なら、tarsan のような「高サ有ム」系と、tarsari のような「高サ有リ」系の二形がある。前者を「ム」系、後者を「リ」系と称する。沖縄から南の島々では、この二形のうち「ム」系だけが分布し、「リ」系はみられなくなる。沖永良部島ことばは、この点に関していえば、沖縄と同様に「ム」系がさかんで、「リ」系はみられなくなっている。

沖永良部島の母音は、沖縄に近づいている。しかし、沖縄と異なる点は、中舌母音の *i* の性格をかすかにとどめていることである。たとえば国頭では、

ni: (根) に対して ni: (荷)

hadzi (風) に対して Φadzi: (恥)

のように対立している。また畦布(あぜぶ)では、

ʔusi (臼) に対して ʔuji (牛)

kudzɪ (澱粉) に対して kudzi: (籤)

midzɪ (水) に対して mudzi: (麦)

のように対立している。ただし、国頭では区別されていた「根」と「荷」は、畦布ではともに ni: となって区別がない。対立する語に多少の出入りがあるということで、

区別を失う段階が異なるということである。これらの母音の区別を失えば、母音構造は、沖縄と同じとなる。

広母音の音節における k 音は h,  $\Phi$ ,  $\zeta$  に変化している。hasa (笠),  $\Phi$ uri (これ), cijun (蹴る) など。

## カ行子音の変化と分布

カ行子音の変化は、さかんに起こり、広母音音節においては、k → h となる。

「風」において、hadix, hadzi: のように、語頭の子音はすべて h 音に変化している。

「煙」は、ほとんど全域で  $\zeta$ ibu $\zeta$ i であり、わずかに  $\zeta$ ibu $\zeta$ i もみられる。琉球列島の「木」は、音韻対応からみれば、ケに対応する語であるから、沖永良部島では全域で  $\zeta$ i: となっている。

「声」は、ほとんど全域で  $\Phi$ ui である。

語中においても同様の現象が起こっている。

「竹」は、ほとんどの地域で de: になっている。これは daki → da $\zeta$ i → dai → de: の変化過程を経たものである。

「蛸」は to: であり、tako → taku → ta $\Phi$ u → tau → to: のように変化している。

語中の k が脱落する現象は広く奄美方言にみられる。和泊町を中心に taku のように k 音をもつ語があるが、これは沖縄の影響によると考えられる。

狭母音音節についてみると、「肝」は、kimu または t $\zeta$ imu である。k 音が口蓋化することはあっても摩擦音に変化することはない。これは広母音音節における場合と異なる点である。

「釘」は、kugi あるいは kud $\zeta$ i といい、語頭の k 音に変化がない。語中の g は口蓋化して d $\zeta$  となっている。

k 音は、i 母音音節で口蓋化することはあっても、摩擦音へ変化することがなく、また u 母音音節では、ほとんど変化しないということである。

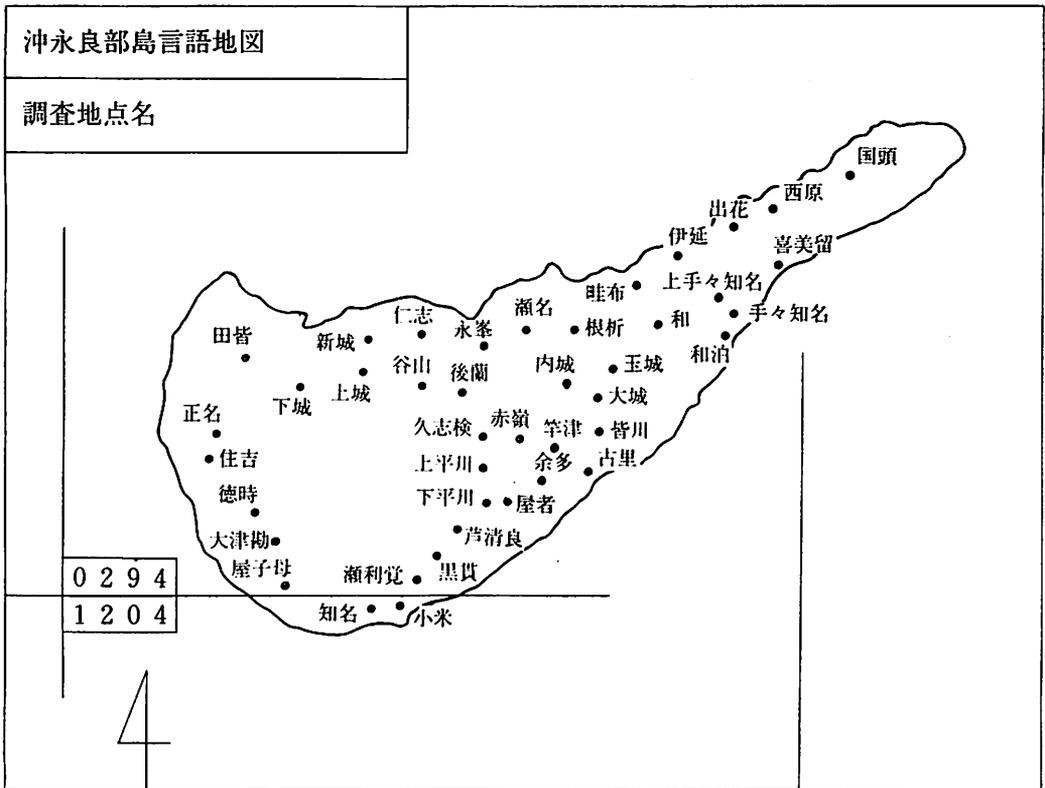
以上のカ行子音の全体的なすがたをみて、口蓋化現象をみることにしよう。

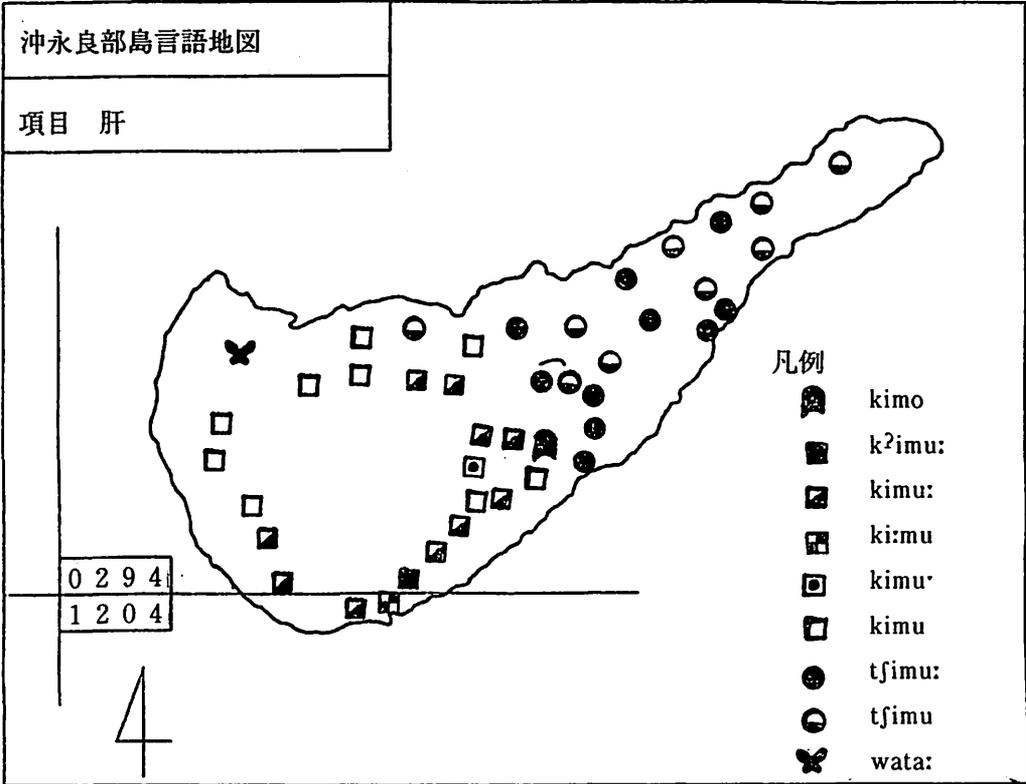
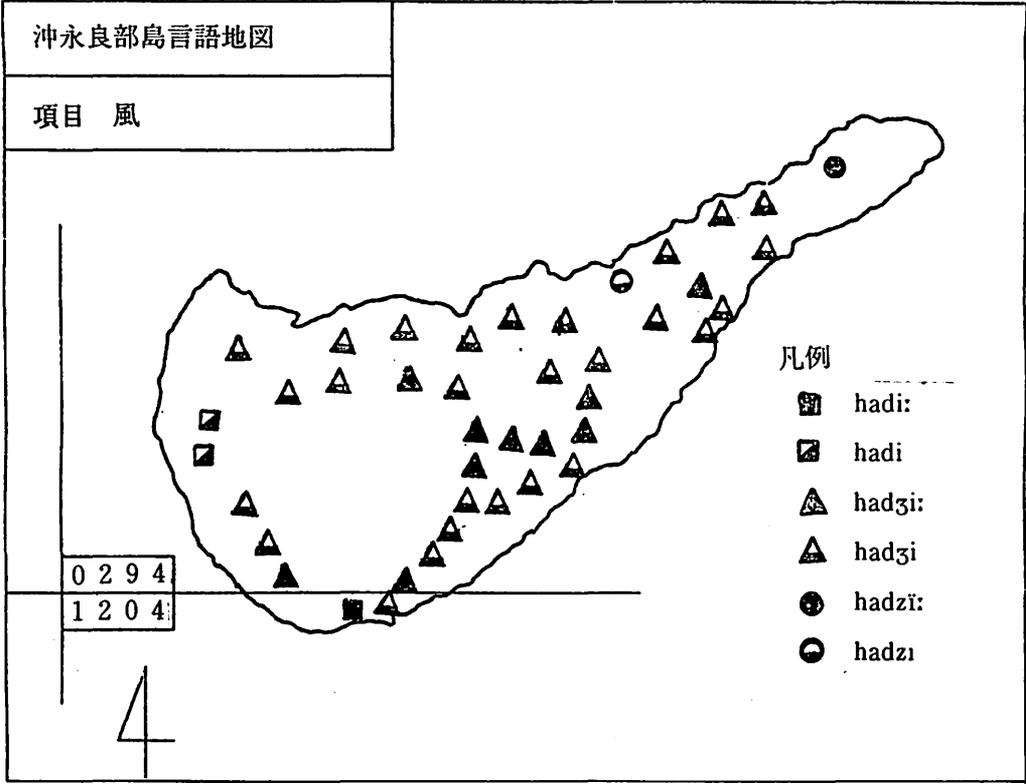
琉球列島には、いわゆる i 母音の影響でその前後の子音が口蓋化する。k ならば t $\zeta$  に変化する。沖縄首里ならば、「肝」が t $\zeta$ imu、「烏賊」が ?it $\zeta$ a となっている。首里に関していえば、15世紀のころにはすでにこの変化が起こっていたらしい。それは、『おもろさうし』に、「ちよらのはな」(清らの花)、「ちよわる」(来おはる、おいでになる) のように「キ」が「ち」と表記されていることから推測することができる。

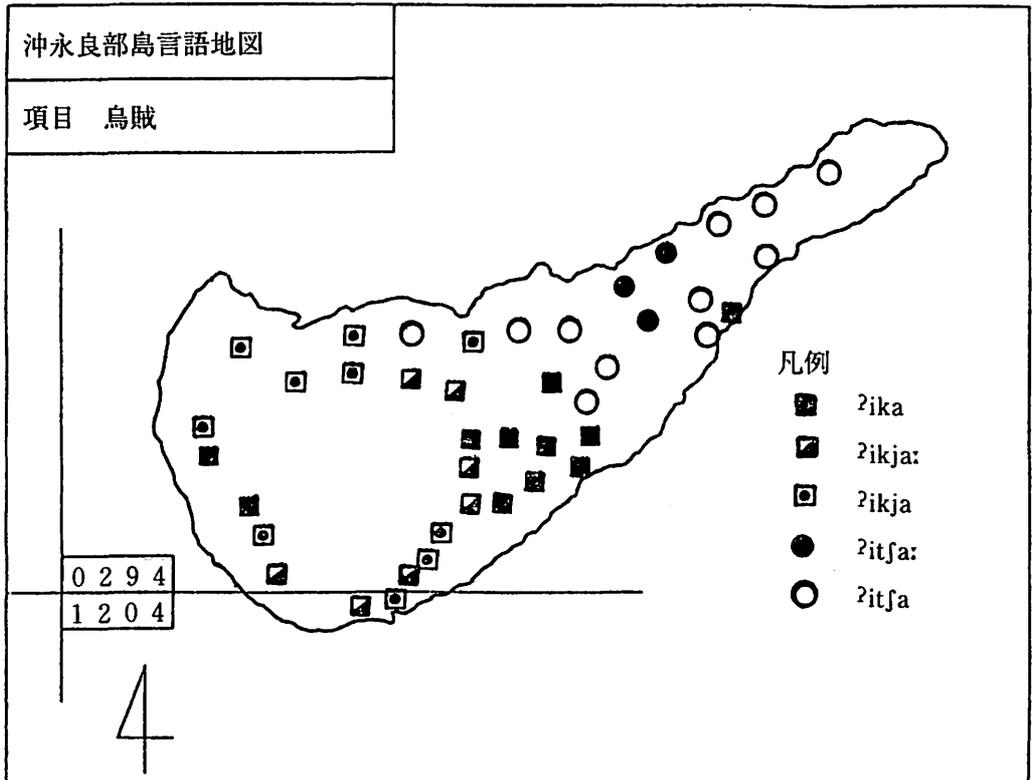
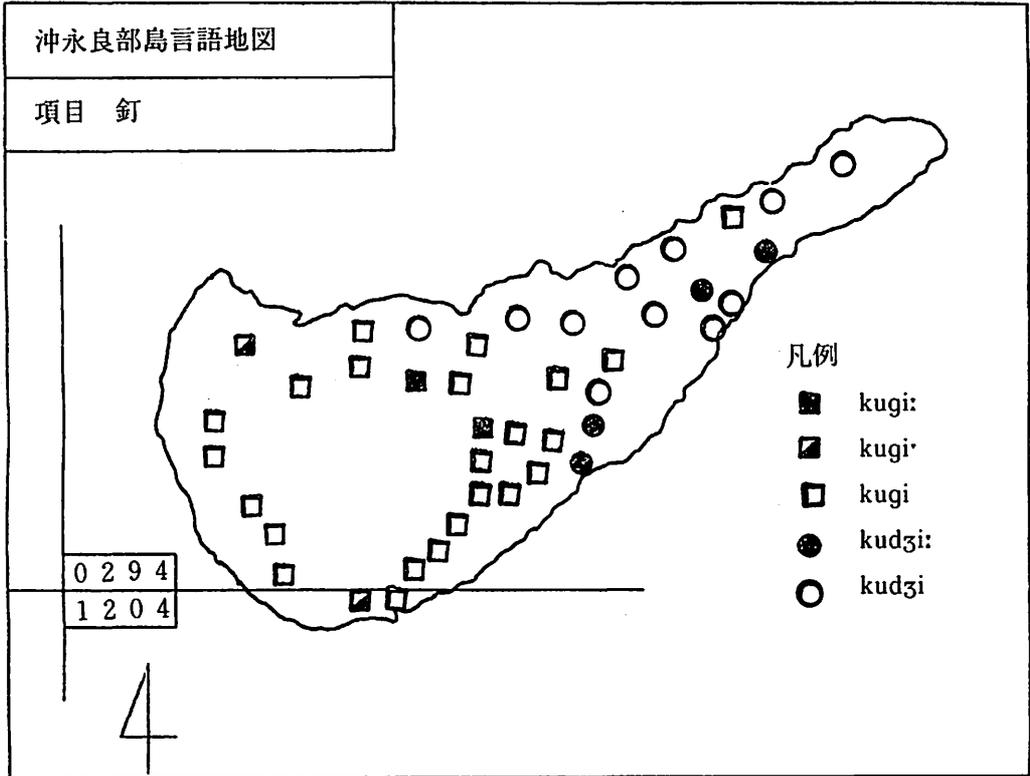
口蓋化現象は、首里を中心に起こり、沖縄中南部に広がり、そこから周辺に広まっていったと考えられる。

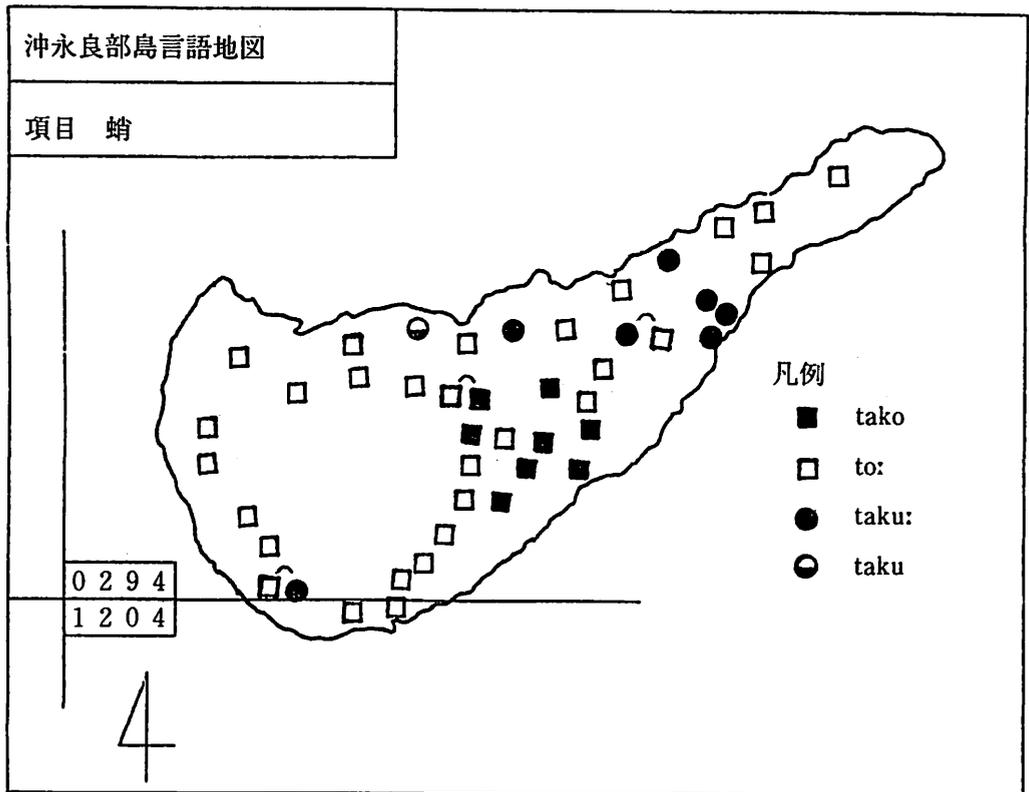
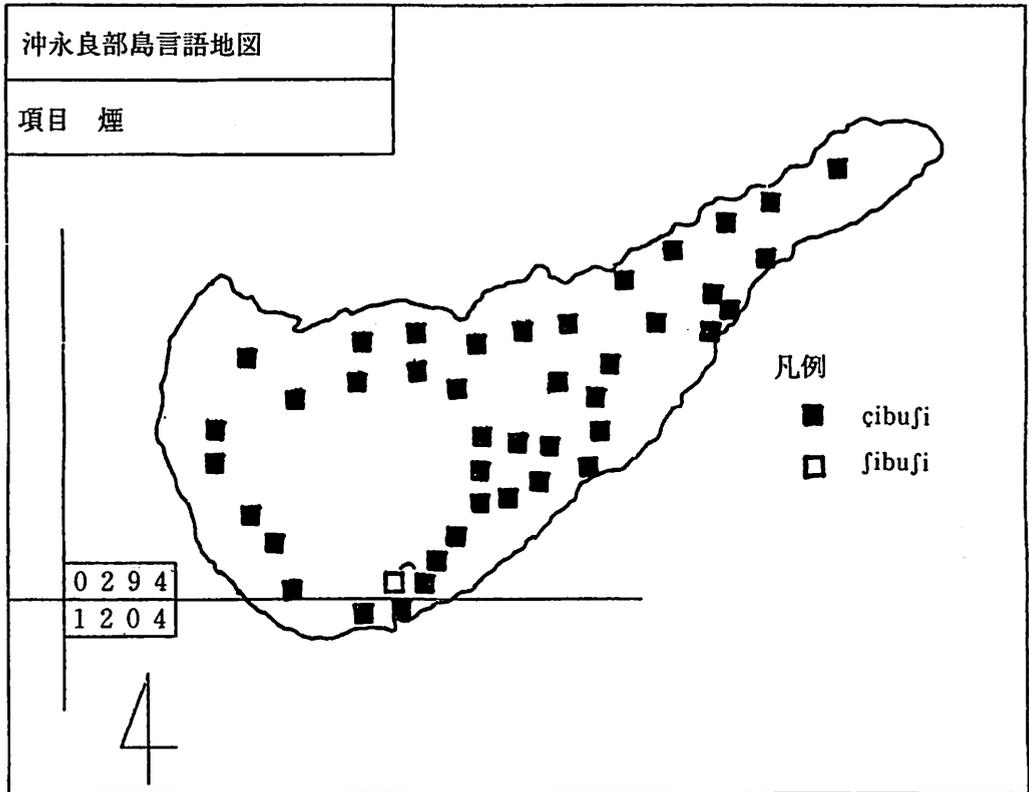
沖永良部島の「肝」についてみると、口蓋化して tʃimu または tʃimu: になる地域が和泊町を中心に広がっている。「烏賊」をみると、ʔika と ʔikja と ʔitʃa があって、口蓋化現象の各段階が現れている。ʔika と ʔikja が知名町にあり、ʔitʃa は和泊町に集中している。和泊が琉球王国時代に役所の置かれた文化の中心地であったということが重要となってくる。ここを窓口にして、首里文化の ki → tʃi の口蓋化をとり入れた可能性が強い。

ただし、この変化は音韻変化なので内的変化とみてよいのであって、地理的な影響を考える必要はないかも知れない。しかし、首里文化と接触することによって内的変化が早められたとみることはできるであろう。









## 鼠の分布語と時代層

鼠を表す語について、『図説琉球語辞典』から琉球列島の全域分布をみると、ユムヌ系が沖永良部島と与論島、そして南の宮古島にあり、ウエンチュ系が沖縄と八重山にあり、ウヤザ系が八重山にあり、ネズミ系が奄美大島、喜界島、徳之島にある。この分布を歴史的に解釈すると、ユムヌ系が古く、ウエンチュ系、ネズミ系が新しい。

沖永良部島をみると、ユムヌ系とオイシャ系が圧倒的に多く、わずかにネズミ系が入っている。ところで、オイシャ系は西の知名町に多く、ユムヌ系は東の和泊町に多い。よくみると、オイシャ系とユムヌ系が併用されている地点もある。

これら両系は、琉球列島の全域分布とどうつながるであろうか。?oifa と同系とみられる語をひろくと、八重山の ?oidza や weida、そして沖縄の ?wentju などである。してみると、オイシャ系は沖縄のウエンチュにつながっている。一方のユムヌ系は宮古島につながっている。

歴史的な段階はどうなるのであろうか。沖永良部島だけを見てみると、和泊が文化の入口とすれば、?oifa が古く、jumunu が新しいといえる。これは列島全域の解釈と異なる。

解釈には全域分布を優先し、これと矛盾してはならないと考えられる。オイシャ系とユムヌ系が、いずれも「上の人」「夜の者」という婉曲表現からなっていて、これは稲作文化との関連から、害が及ぶことを恐れる気持ちによってなされた表現である。してみると、両系は、併用形として琉球列島全域に広まり、その定着は地域によって異なると解すべきであろう。

## 蛙の分布語と時代層

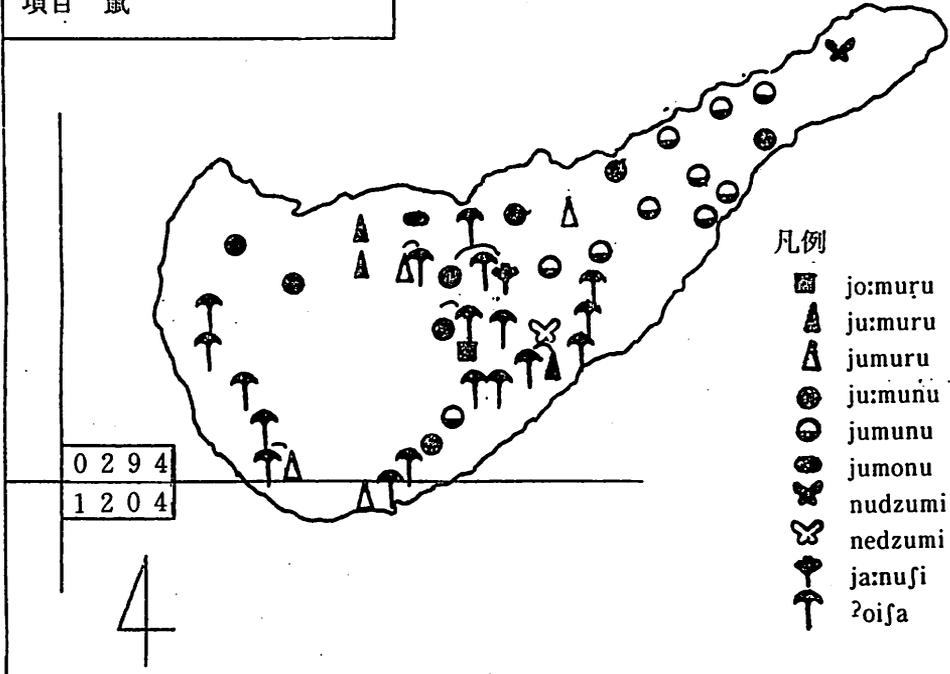
沖永良部島における蛙の分布語は、ガーク系とアタビク系である。

琉球列島の全域分布を『図説琉球語辞典』によってみると、南の八重山にアウタ系、宮古島にフナタ系があり、北の奄美大島、喜界島にビキ系がある。中間の沖縄にはアタビキ系がある。この分布から、アウタ系のあるところにビキ系が入ってきて、混交によってアタビキ系を生んだと解される。琉球列島の全域分布だけでは、沖永良部島のガーク系を解くことはできない。

そこで、『日本語語地図』によって九州をみると、ビキ系とワクド系、ドンク系などが優勢語形であるが、わずかに五島列島にギャクとか、ギャッキヤッ、ガクジョ、

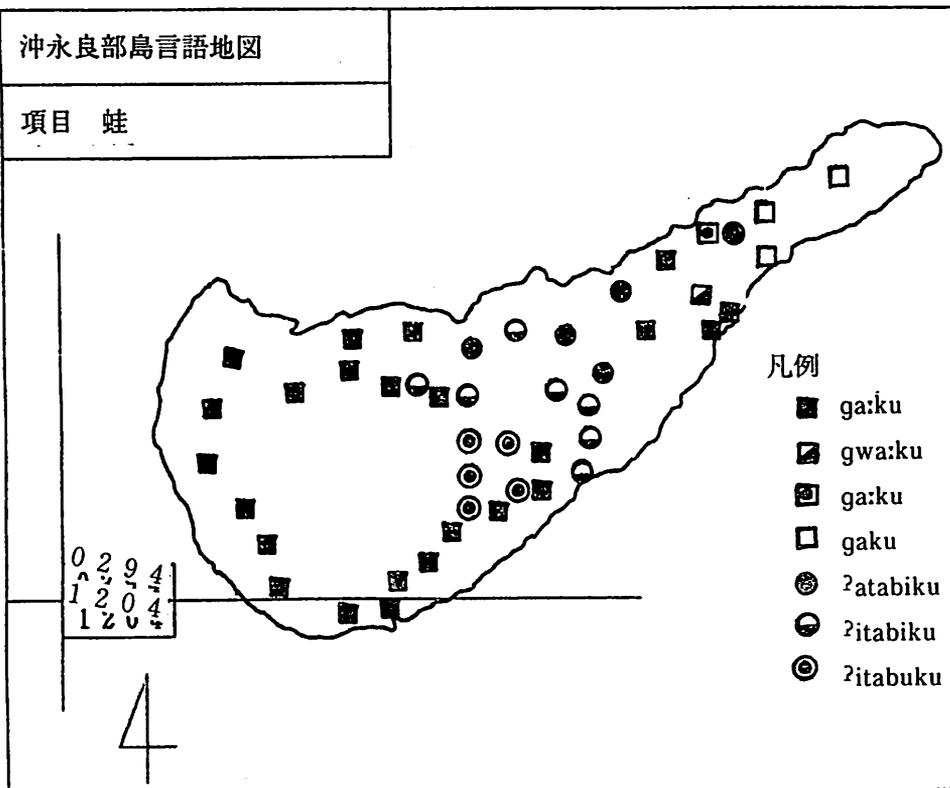
沖永良部島言語地図

項目 鼠



沖永良部島言語地図

項目 蛙



ギャクジョ、そして熊本や福岡あたりにタンガクがある。これらの語形を構成しているクは、ガークのクと同系とみられる。もっともガークやギャークは、蛙の鳴き声から来たものであろうけれど、いったん蛙を表す語になってしまうと、系統的な考察にたえうるようになると考えられる。

以上から、ビキ系とガーク系は九州と関連しているとみられる。いまいちど沖永良部島の分布をみると、アタビキ系が島の中央部に分布しており、知名や和泊の港の近くにはガーク系がある。この分布は、沖永良部島にビキ系が先に入り、ガーク系が後に入ったことを示している。このことは、琉球列島全域についてみてもいえることである。

### 左の分布語と時代層

「左」を表す分布語は、ヒダリ系とヒガリ系である。ヒダリ系は東の和泊町に分布し、ヒガリ系は西の知名町に分布している。しかもヒガリ系は島の中央部に分布している。

琉球列島の全域分布を『図説琉球語辞典』でみると、多くがヒダリ系であるなかに、ヒガリ系が混じっている。沖縄北部で pige: や Φige: があり、徳之島に siġjari や siġjai、figjai がある。

いったい、ヒガリ系は、どのような語形であろうか。とくに、その第2音節の「ガ」と「ダ」は、いずれが古いのであろうか。

文献語をたどると、『おもろさうし』に、「ひちやりも にきりも かなしや」(左も右も愛し)のように、ヒチャリ(左)がニギリ(右)の対語として現れている。おもろ時代に、ヒチャリのようにすでに第2音節が口蓋化している。口蓋化のチャ d3a は ga にも da にもさかのぼりうるので、ヒガリとヒダリのいずれにさかのぼるのか、決定できない。そこで、ヒガリの由来について、二つの考えかたがありうる。

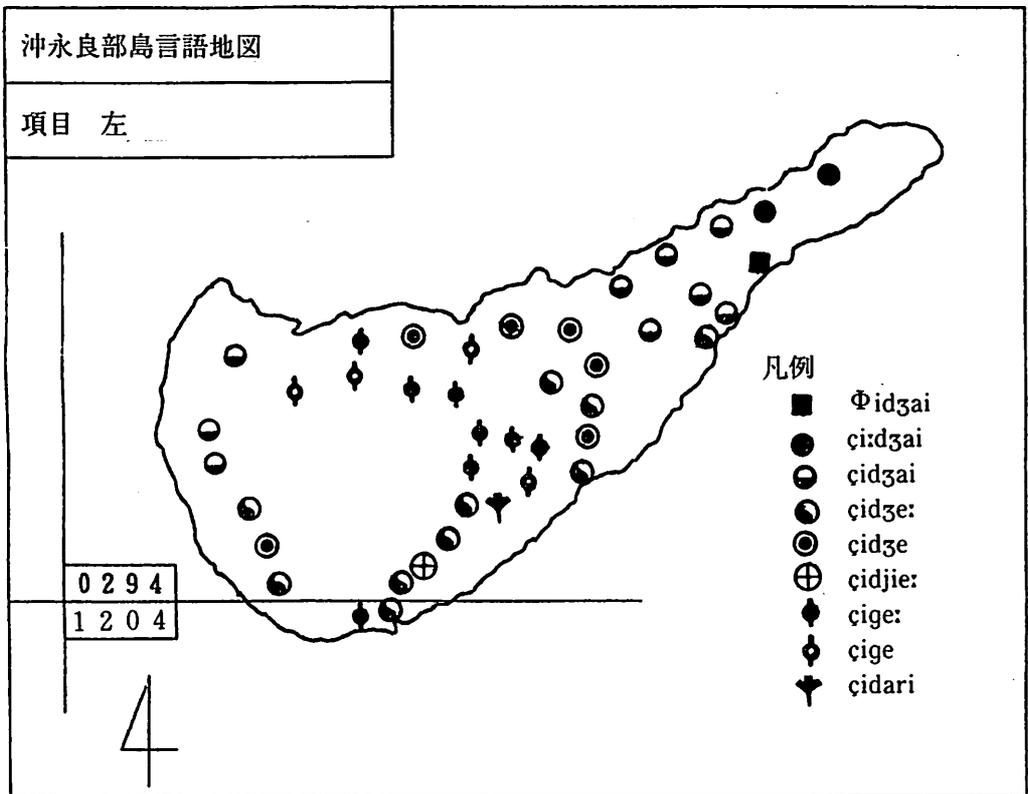
その一つは、古来からヒダリ系だけがあったが、ある時期に口蓋化が起こって da → d3a と変化した。一方では、同じ口蓋化の影響で ga → d3a の変化も起こっている。da と ga が統合する。そこで、d3a の回帰現象によって、誤った回帰のために、ga を獲得したと考えるものである。

いまひとつは、ヒガリ系を古層とみるものである。古代において「左」は右より尊ばれていたという。『古事記』にある、左の目を洗うと天照大神が誕生したとする記述は重大な意味をもつ。太陽の出現する東方を左目になぞらえた表現であったと考え

ることができる。そうすると、「左」と「東」が同語根で構成されても不思議はない。また、家屋は南向きに造るから、日常の生活でも「左」と「東」は一致する。

分布からみても、ヒガリは沖永良部島だけでなく、沖縄や徳之島にもあり、古層の残存的な分布を示している。ちなみに、çige: (左きき) は沖縄南部にある。誤った回帰が、いくつかの地点で起こることは不自然といわねばならない。

琉球列島の「東」はアガリであるが、これはアガルへ (上る辺) という新しい語形であり、その古層にヒガがあった。結局、ヒガリのヒガは「東」のヒガであり、「左」を表すヒガリは、ヒダリより古層である可能性が強くなった。



／参考文献／

国立国語研究所『日本言語地図』大蔵省出版局，1974年完

中本正智『図説琉球語辞典』力富書房，1981年

中本正智『琉球方言音韻の研究』法政大学出版局，1976年

中本正智「喜界島方言の言語地理学的研究」『日本語研究』東京都立大学，1987年

本研究は実験講座になって初年度から企画された調査研究プロジェクトの成果の一部である。調査に協力された方々は次の通りである。心から感謝を申し上げる。

調査地点と話者

地 点	話 者	生年月日(年齢)
和 泊	吉 田 キ ク	明38. 8.22(82歳)
和	前 ナ ツ	明42. 8.18(77歳)
手々知名	町 田 カ メ	明32. 1. 8(88歳)
上手々知名	田 浦 ハ ル	明40.10.19(79歳)
喜 美 留	伊 地 知季一	明32. 5.20(89歳)
出 花	山 下 純 利	大 5. 7.10(72歳)
伊 延	松 田 定 矩	昭 3.12.28(58歳)
畦 布	森 力 子	大14. 2. 1(62歳)
国 頭	名 島 ア イ	大 2. 6.25(74歳)
西 原	東 一 之	大11. 8. 6(64歳)
根 折	栄 ミ ツ	大 3.11.28(74歳)
玉 城	花 田 吉 浦	明36. 9.22(84歳)
大 城	谷 山 植 網	明42. 7.25(78歳)
皆 川	平 光 代	大13. 2.19(63歳)
古 里	島 田 ツル子	昭 4. 7.19(58歳)
内 城	武 宮 礼 子	大13.10.25(62歳)
後 蘭	前 田 ミ ツ	明44. 3.10(76歳)
谷 山	中 光	大 6. 6.15(70歳)
仁 志	沖 信 一	明40. 7.10(80歳)
永 峯	池 村 カ ネ	明31.12.18(90歳)
瀬 名	市 来 武 義	明43.10. 8(77歳)

知 名	新 山 マ ツ	大 6. 4. 1(70歳)
小 米	宗 前 カーネ	明43. 1.19(77歳)
瀬 利 覚	東 里 並	明44.10.20(76歳)
	田 畑 原 明	大10. 7. 5(66歳)
黒 貫	高 風 栄 沖	明36.12. 5(84歳)
芦 清 良	山 元 彊	大 5. 7. 1(72歳)
屋 者	成 美 照 子	昭 2. 3.31(60歳)
余 多	安 田 哲 裕	大13. 6.19(63歳)
下 平 川	中 田 一 男	大10. 4. 1(66歳)
上 平 川	木 下 西 村	大 5. 1.10(71歳)
竿 津	宗 村 ウ ト	大 2. 9. 3(75歳)
赤 嶺	久 保 ト ミ	大11.11. 5(64歳)
久 志 検	中 村 ア キ	大 5.12. 1(70歳)
屋 子 母	西 初 枝	大 7. 5.25(69歳)
	栄 静 子	大14.10. (61歳)
住 吉	原 ウ ト	大12. 3.20(64歳)
正 名	山 下 稻 重	明44. 4.27(76歳)
田 皆	福 留 納 誠	大 6. 2.15(70歳)
下 城	長谷川 ヒ サ	明39. 7.27(81歳)
上 城	神 崎 宗 光	
新 城	遠 江 東 徳	明38. 3.10(82歳)

本稿をなすにあたり、助手の篠崎晃一氏と学部学生の西野千春氏にご協力いただいた。記して謝意を表する。

(なかもと まさちえ・東京都立大学教授)